

〈原著論文〉

震災復興期における学生ボランティアの学びと役割 ——復興支援ボランティアスタディツアーの取り組みから——

川 田 虎 男

抄 録

本研究では、震災復興期における学生ボランティアに焦点を当て、その役割と学びについて調査を基に考察を行った。結果、特徴的な学びとして、「命」への理解と「ボランティア理解」の深まりが見出された。復興期の学びの特徴として、関わる町の歴史・文化等の固有性を理解し、「まちづくりに向けた知識・技術への学び」が深まっていることが明らかになった。さらに、リーダー層の学生たちは、「リーダーシップ」への学びが深まっていた。また、復興期のボランティアには被災者自身の自立の視点と被災者との双方向協働型の関わりが求められているが、学生ボランティアは、その特性故に支援を受ける側の「心理的負債感」を軽減しうる点を指摘した。

キーワード：ボランティア，学生，市民活動，復興支援

序 章

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、岩手・宮城・福島の本州3県沿岸部の大津波による被害を中心に東日本全域に対して甚大な被害をもたらした。死者はその後の災害関連死を含めると19,533名とされ、未だに2,585名の行方不明者が存在する⁽¹⁾。震災直後、全国から多くのボランティアが駆けつけがれき撤去を始め、多様な活動を展開した。しかし、震災から6年が経ち、ボランティア活動が大幅に減少している状況にある。震災直後より、災害ボランティアセンターを立ち上げ、ボランティア活動者の統計を取っている全国社会福祉協議会の情報サイトによれば、震災直後からの1年間に岩手・宮城・福島の本州3県にボランティアに入った人数は約100万人であったが、年々減少が続きデータのある直近1年間（2016年2月～2017年1月）では、約3万人となっている⁽²⁾。このデータは、あくまでも社会福祉協議会のボランティアセンターを通して活動に入ったボランティアの集計であるため、東日本大震災全体で活動したボランティアの数ではない。しかし、震災6年目を迎え、ボランティアの数が震災当初の約3%と激減していることが分かる。被災地では、

震災当初行われていたがれき撤去等の活動は終了したものの、仮設住宅から復興住宅への移行による新たなコミュニティ創りや震災でダメージを受けた農業・漁業の復興に向けた支援等、ボランティアに対するニーズが存在している。さらに、震災以前より抱えていた、少子高齢化の進展や震災後の人口流出も加わり、人口減少も深刻な課題となっている。

そこで本稿では、復興期というボランティアが減少する時期における学生ボランティアに焦点を当て、その役割と学びについて調査を基に考察することを目的とする。第一に大震災におけるボランティアに期待される役割について概観し、復興段階の学生ボランティアの役割について整理を行う。第二に、学生のボランティア活動、特に災害・復興ボランティアにおける教育的意義と課題について整理を行う。第三に、本学の復興支援ボランティアスタディツアーの取り組みとツアーに参加した学生の感想から、リーダー層と一般の参加者と分けた上で、活動を通した学びについて分析する。

第一章 震災ボランティアと大学生

第一節 フェーズによって変化するボランティアの役割

1. 震災後のフェーズとボランティアの役割

1995年1月に発生した「阪神・淡路大震災」では、全国から120万人を超えるボランティアが駆けつけ「ボランティア元年」と呼ばれ、後の災害ボランティアにも大きな影響を与えている。山下・菅(2002)⁽³⁾は阪神・淡路大震災の被災地域における局面を「緊急救命期」「避難救援期」「生活再建期」の3つの時期に分け、時間の経過とともにニーズが変化し、それに伴ってボランティアに期待される役割も大きく変わることを指摘している。さらに、太田(2013)⁽⁴⁾は大学生が東日本大震災の復旧・復興に果たす役割を検討し、「発災直後：自分の居場所での活動」「復旧段階：自己完結型活動」「生活再建段階：被災者の自立に向けた協働活動」「継続的に行う中・長期的活動」の4段階ごとに、学生に期待される多種多様な役割をまとめた。

2. 復興期における災害ボランティア

広辞苑によれば、“復興”とは「ふたたび盛んになること」と定義され、“復旧”とは「もと通りになること」とされている。つまり、震災に見舞われる前の状況に戻す“復旧”に対して、再び盛んになるという“復興”はより多様な意味を持つことになる。この長期に亘る「復興期」のボランティア活動が目されたのは、阪神・淡路大震災から10年後に起きた2004年10月の新潟中越地震であった。渥美(2014)⁽⁵⁾は中越地震の被災地において、過疎・高齢化・伝統社会・集落への誇りなど、都市社会では顕著ではない事柄がきっかけとなり、それまで救援活動に焦点を当ててきた災害ボランティアが、集落復興という新しい活動へと幅を広げ、同時に活動の射程が時間的にも延長した点を指摘している。

関 (2013)⁽⁶⁾は、災害ボランティアが復興において果たす役割について考える際、現状復旧志向に向かわず被災者自身の自立を促し新しい環境を作り出す動きとして捉えるために、「開発」特に「社会開発（人間開発）」という視点から考えることが有効であると指摘している。その上で、「復興における災害ボランティアは被災者が経済的に立ち直ることを支援するだけではない。人と人とのつながりによって、被災者が自らの生活を見直し、被災者自身や被災者を取り巻く環境を、被災者が望ましいと思える状態にするために支援していくことも災害ボランティアの復興における活動の目的になる」としている。さらに、被災者の自立のために外部から潜在能力を發揮させるように働きかけると「何かしなければならぬ」と考えてしまうが、「被災者のそばから離れずにいろいろな体験をしていくと、被災者と災害ボランティアが関わっている問題が被災者だけの問題ではなく、災害ボランティアを含めた社会の問題であるという関連性を発見し、共に考え、行動することが可能になって来る。そうすることで両者は、被災者の質的な豊かさの追求を支えてきた」と指摘している。以上の議論を受け、復興期のボランティアに求められる方向性として、①被災者自身の自立の視点②一方的支援ではなく被災者との双方向協働型の関わりを見出すことができる。

第二節 学生の災害ボランティアにおける教育的意義と課題

東日本大震災に関わる学生ボランティアについての先行研究は、学生に期待される役割、活動先への効果や活動者自身への影響、さらには活動に当たった課題等、いくつかの報告がなされている。その中でも特に、活動する学生自身への教育効果や影響についての報告が多い。

1. 災害ボランティアに取り組む学生への教育効果

茶屋道ら (2012)⁽⁷⁾は、活動を通して学生たちが「事象の背景を捉える」「気遣い・気懸かりを持つ」「生活の再構築に対する気づき」など、対人援助の基盤となりうる重要な要素に触れていたことを明らかにした。また、集団での共同生活からチームワークを生み出し、不慣れな土地でも協力して対象者と関わっていく力動性を生み出したことを報告している。また同様に教育的な意義があるとみなす研究として、石田ら (2013)⁽⁸⁾は、活動によって学生が得る力を短期・長期で分類したところ、短期の活動においては①動機の充足や目標達成による自己実現②対人関係能力やコミュニケーション能力の向上③社会的承認欲求の充足による自己有用感の向上が認められ、長期に活動した学生では、上記3件に加え、④問題解決能力の向上⑤他人を人として尊重する力の向上が見られ、さらに1年以上活動した学生には⑥地域を基盤とする生活力の向上を見ることができたと報告している。さらに、市来ら (2013)⁽⁹⁾は、教育大学生の被災地の学校の児童・生徒に対する学習補助ボランティアを行った経験から、〈教育実習に類する経験〉と〈被災に関する気づき〉重複部分としての〈学校現場での被災に関する気づき〉を持ち、それらの経験から【今後の生き方に関わる気づきや予感】や教員を目指す【キャリア形成】に係る内省が生成されたと指摘している。市川 (2015)⁽¹⁰⁾は、東日本大震災の復興支援活動に取り組んだ学生の学びと変容について調査し、「学ぶ意欲の

向上」「社会への問題意識が深まる」「コミュニケーション能力が向上する」などの成長の実感を持っていることを報告している。ボランティア活動による活動者自身への影響について、津止ら(2009)⁽¹¹⁾は、その効果を①認知発達②専門学習への動機付け③市民性の獲得の3つに分けられるとしているが、上記3者の指摘も主として認知発達と市民性の獲得につながる変化であったといえる。

本研究も、基本的にはこれらの流れの中に位置づけられるが、先行研究では主に震災から1～2年と復旧期における活動を調査対象としている。それに対し、今回の調査対象は、震災後3～6年と復興期にあり、活動プログラムも大きく変わっている。そのような中でボランティア活動に取り組む学生たちへの学びについて調査・研究は行われていない。そのため、「復興期」ならではの学びについても検証を行う。さらに、活動を行うに当たり企画・運営を担うリーダーは、他のメンバーと違い準備も含め長期間に亘り活動に関わるため、活動を通しての学びについても、他の参加者たちとの違いがあると考えられる。そこで、一般の参加者とリーダーとして企画に関わった学生との違いについても比較を行う。

2. 学生による災害ボランティアの課題

野津ら(2017)⁽¹²⁾はボランティア活動の教育的意義を認めつつ、東日本大震災以降関西で活動していた震災支援の10団体以上の学生団体が2014年度現在ほとんど休止状態にあるとし、学生ボランティア団体が継続することの難しさを指摘している。その中心的な課題を「帰属意識の弱さに起因する」とし、①ミッションの共有の困難②学生の多忙さによる活動時間確保の困難③遠隔地同士の相互交流の困難の3点を挙げている。こうした課題をクリアするためには、①授業と連動したボランティア活動②ボランティアセンターの設置という大学や教職員の制度的・継続的関与が必要になると指摘している。

この指摘については、学生の活動時間の確保が困難になったとあるが、過去活動に取り組んだ学生と比較して忙しくなったというよりは、モチベーションが下がったことにより優先順位が落ちたということも考えられる。本稿で取り上げる聖学院大学においては、東日本大震災へのボランティア活動がきっかけとなり、ボランティア活動支援センターが発足し、2017年度からはコミュニティサービスマーケティングという正課科目の一環としても釜石でのプログラムが展開されている。野津の指摘を受けるなら、現在も活動が継続している理由として、この組織的な支援が一定の効果を果たしていると考えられる。しかし、関西方面ほどではないにしても、大学のある埼玉と活動地である釜石ではバスで片道8時間と長距離であり、活動を継続するには一定の負担が伴う。ミッションの共有においては、卒業生を含めた先輩から後輩への継承、被災経験をした学生が直に体験を語りリーダーとして引っ張っていることで保っているが、それでも活動の継続について、多くの課題を抱えている。

第二章 復興支援ボランティアスタディツアーの概要

聖学院大学では、2011年の震災直後より学生・教職員が中心となり被災地への支援活動を行っているが、中でも岩手県釜石市においては2011年より継続的に年2～3回の復興支援ボランティアスタディツアーを組み、被災地を訪れたことのない学生にも、復興支援活動に関われるような仕組み作りを行っている。地元の間接支援団体とも連携し、現地のニーズの変化に対応するため、毎回プログラムに修正を加えながら学生主体の企画を行いつつ継続している。学生たちにとっては、活動を通して多くの学びと成長の機会にもなっている。

第一節 受け入れ先の釜石について

岩手県釜石市は、元々鉄鋼業で栄えた町で「ラグビーと鉄の町」として有名であった。しかし、東日本大震災では、20Mを超える津波が襲来。死者・行方不明者 1,040人約3割の住宅が被災(4,658戸/16,182戸)(全壊2,957・大規模半壊395・半壊300・一部損壊1,006)特に鶴住居地区では、本来津波の避難場所ではなかった2階建ての「防災センター」に多くの市民が避難したことで、100名以上の犠牲者が出たといわれている。(釜石の悲劇)また、そこから200m程離れた鶴住居小学校・釜石東中学校では、地震後津波の襲来を予想した中学生が隣にある小学校の生徒の手をつなぎ避難したため、学校にいた生徒は全員無事であったことから釜石の出来事(当初は「釜石の奇跡」と呼ばれていた)として、防災教育に力を入れた地域としても有名である。2017年6月現在においても、仮設住宅で暮らしている被災者は1,000戸を超えている⁽¹³⁾。聖学院大学では、震災直後からの継続した支援活動を受け、2014年1月からは釜石市との連携協定を締結している。本ツアーについても連携協定事業の一環として実施している。

第二節 主なプログラム概要

1. 東日本大震災の被害を知る

地元支援団体の協力を得て、2011年3月11日に何が起きたのか、震災遺構を巡り、あの日起きたことについて話を聞く。

2. 釜石よいさへの参加

復興の象徴の一つとして2013年に復活した夏祭り「釜石よいさ」に参加し、釜石の文化を学ぶとともに共に復興に向けた思いを共有する。

3. かまっこ★あそびーらんどの実施

仮設住宅等でおもいきり走り回って遊ぶ機会が減っている子どもたちを対象に一日遊べ

るプログラムを学生企画で実施。

4. 現地のニーズに基づいたプログラム企画

その時々、現地からの依頼に基づき活動を実施。現地の同世代との交流会や国体開催に向けた環境整備、さらに学習支援として夏休みの宿題教室等を実施。

5. 振り返り

活動で終わらせることなく、活動を通して気づいたこと、考えたことを振り返り全体でシェアする時間を持つ。一人ひとりが今後、どのように被災地を向き合い、関わっていくかを掘り下げる。

2011年当初は、がれき撤去等の活動も行っていたが、夏のプログラムは2014年からの開始であり、すでに震災から3年を経た復興期からのスタートであった。そのため、現地のニーズによりそうことはもちろんのこと、一方通行で提供するプログラムを極力減らし、現地の方々との双方向の関係づくりを行う協働型のプログラム作りや一見すると居るだけもしくは学生が地元の方にお世話になっているようなプログラムも計画された。

第三節 実施に向けた取り組み方法

本事業はボランティア活動支援センターと学内の学生団体である復興支援団体との共催で運営・実施されている。主な役割分担として、交通手段や宿泊等についての手配はセンターが、具体的な活動の企画については、学生からプロジェクトリーダーを募り、3ヶ月前から週1回ミーティングを行い、現地の下見、プログラム作り、当日の進行についても分担しながら進められた。特にプロジェクトリーダーは、他のメンバーと違い準備も含め長期間に亘り活動に関わるため、活動を通しての学びについても、他の参加者たちとの違いがあると考えられる。

第四節 事前研修と振り返り

事前研修はツアー実施の1週間程前に4時間程度行った。その内容は次の3点からの構成である。①震災で起きたことと現在の被災地の状況についての学習（映像）②参加者同士の顔合わせと活動への思いの共有③活動に臨む上での注意事項と準備（踊りの練習など）。①の被災地の学習については、初参加者とリピーターを分け、初参加者には震災直後の津波や被災された方々取材したドキュメンタリー、リピーターにはその都度変わる現地の様子の特集した番組などを上映したのち、被災を経験した在校生より、震災体験と避難所での生活について話を聞いた。②の顔合わせと思いの共有は、初参加で初対面のメンバーも多く参加者同士の関係づくりと共に、活動への動機を共有することで、後の振り返りにおいて、その動機が達成できたかを確認できるような仕組みとした。③の注意事項と準備では、活動上の注意点、特に被災を経験した子どもに対する接し方等、プログ

ラム上必要な知識・技術について、専門の教員による講義を行った。

また、現地では振り返りの時間を2度持っている。1回はツアー最終日の前日夜、2時間半をかけ、事前学習の際活動に向けた思いを共有したグループで集まり、①ツアーを通して感じたこと・気づいたこと②被災地の復興のために自分たちができることは何か③この悲劇を繰り返さないために、自分たちのまちでできることは何かについて、話し合いを行った。2回目は、片道8時間という移動時間を利用し、帰りのバスの中で一人ずつ①ツアーの感想②ツアーを受けてこの1年間で何をするか（釜石や被災地のために自分の街や大学で震災があった時に、同じ悲劇を繰り返さないために）について、一人ずつ語る時間を設けた。

第五節 釜石における活動の変化～復興期の学生への期待～

釜石における活動の変化について、ボランティアの受け入れ・調整を行っている中間支援組織「三陸ひとつなぎ自然学校」による、現地のフェーズの認識をもとにこれまでの取り組み内容と学生ボランティアが果たしてきた役割について整理を行った。

表 1. 三陸ひとつなぎ自然学校による釜石のフェーズと役割の変化

フェーズ	フェーズ1 緊急支援	フェーズ2 生活再建・産業再生	フェーズ3 新たな挑戦を生み出す	フェーズ4 “持続可能性”の創造
時期	2011年3月～8月	2011年9月～2013年3月	2013年4月～2016年3月	2016年4月～
目的	生活の安定を取り戻す 生きる	復興＝地域の誇りを取り戻す		世界に誇れるまちをつくりたい
団体の 取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 避難所運営の補助 緊急支援物資のマッチング 青空喫茶の運営 子どもの居場所づくり 瓦礫撤去 	<ul style="list-style-type: none"> 産業の再生 まちづくり計画の策定 がれき撤去 子どもの居場所づくり ボランティアスタディツアー（汗を流す+勉強会+交流会） 	<ul style="list-style-type: none"> 実践型インターンシップの受け入れ 地元中高生プロジェクト 地元の鉄人発掘博覧会 	<ul style="list-style-type: none"> 地域らしさを活かす 経済の循環を促し、若者が暮らせるまちへ
学生が 取り組んだ活動	救援物資の搬送・整理 避難所運営支援 子どもの遊び場運営 瓦礫撤去	瓦礫撤去 被災した住宅の方付け 子どもの遊び場運営	郷土料理を学び発信 地元の高校生徒との交流プログラム 世界遺産、ワールドカップに向けたプロジェクトへの参加 地元のイベントへの参加	地域行事の共同開催（地域清掃・サロン活動） 地域イベントの活性化（祭りへの参加等） 地元高校生の企画支援（アドバイスと後方支援）

※一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校資料を基に川田が作成

本表から、聖学院大学の復興支援活動においても、支援物資搬送に始まり、がれき撤去や被災した住居の方付け等、直接的かつ一方通行の支援から、徐々に交流型のプログラムや協働型の活動への変化していることが分かる。

第三章 調査方法

本調査では、ツアーの参加者の振り返りアンケート、感想文等を基に、参加した学生の学びについて明らかにする。その際、企画を行うリーダー層と一般の参加者との比較と共に、これまでの先行研究と比較し、復興期特有の学びがどのようなものであるかについて明らかにする。

第一節 調査材料

①活動についての振り返りアンケート

このアンケートはボランティアスタディツアー中のプログラムに対する満足度と共に、ツアーを通じて、学生自身の気づき・変化についての質問からなっており、選択式の質問項目と併せて自由記述欄が設けられていた。

②活動についての感想文

これはツアー後に、①なぜ、このツアーに参加しようと思ったか②感じたこと、気づいたこと、学んだこと③学生生活を通じて取り組みたいことの3点をまとめ学生に感想文の作成を求めたものである。

③振り返りの会で使用したメモ用紙

これはツアー中に行われた「振り返りの会」において、ファシリテーターの学生がメンバーの語りをメモしたものである。断片的なメモとなっているが、リアルタイムでの言葉が載っており、現地で感じた事について触れられている。

第二節 分析手続き

上記アンケートの自由記述欄に寄せられた回答、および感想文、振り返りの会のメモ等、扱うデータが文脈依存的なものであるため、質的分析方法を使った。記述にあった、学生自身の「気づき」「学び」に言及した内容を選択し抜き出し、一つずつの言葉を単位とし、記述内容の近いものをグループとしてまとめ、複数の小グループを編成し命名した。次に同様の手続きで中グループ同士から大グループを編成し、全体の関連性についても図式化した上で文章化した。

第三節 対象者

今回は「復興期の活動」として、2014年から始まり毎年8月の中旬に実施されている夏の復興支援ボランティアスタディツアー4回（2014年～2017年）を対象とした。時期、人数、場所については下表に示したとおりである。参加者は、学内に設置されたボランティア活動支援センターより、参加希望者を公募し参加した学生である。

2014年～2017年 夏の復興支援ボランティアスタディツアーの概要

回数	日程	学生の参加者数
1	2014年8月8日(金)～11日(月)	25名
2	2015年8月6日(木)～9日(日)	30名
3	2016年8月5日(金)～8日(月)	30名
4	2017年8月4日(金)～7日(月)	26名
合計		111名

分析に用いたアンケートおよび感想文の総数は118名分（アンケート68名分，感想文50名分）であった。年度別では，2014年度は34名分（アンケート19名分，感想文15名分），2015年度は30名分（アンケート19名分，感想文11名分），2016年度は30名分（アンケート19名分，感想文11名分），2017年度は24名分（アンケート11名分，感想文13名分）であった。アンケートと感想文は同一人物が重複して回答しているが，両方の回答を採用することとした。

第四節 倫理的配慮

本研究は，聖学院大学研究倫理規定を遵守し遂行した。調査対象である学生には，本プロジェクトの評価等の目的で，参加学生へのアンケート等を実施する旨を口頭で説明し，同意を得た。データの分析や記述にあたっては，個人が特定しないよう配慮した。

第四章 結果と考察

第一節 結果

各单位を小・中・大の項目に分類した結果を表2に示す。学生自身の学びは「社会への理解と批判的まなざし」「内面の変化と成長」「自身の生き方への影響」と大きく3つの項目に分類された。一つ目の大項目である「社会への理解と批判的まなざし」では、「震災への気づき」「復興への理解」「防災への取り組み」「地域の理解」「まちづくり」「メディアリテラシー」という6つの内容を含んでいる。二つ目の大項目である「内面の変化と成長」では、「嬉しさと達成感」「自己成長への意欲」「自己理解」「人間理解」「市民性」「大学の学びとの関連」「学びへの意欲」「リーダーシップ」という8つの内容を含んでいた。三つ目の大項目である「自身の生き方への影響」では、「命」「キャリア形成」「日常への感謝」という3つの内容を含んでいた。なお，リーダーのコメントについては，表の右側に○をつけた。

表2. 震災復興期における学生ボランティアの学び

大項目	中項目	小項目	シート	リーダー
社会への理解と批判的まなざし	震災への気づき	震災で生まれたもの	震災は多くのことをうしなしたが「人を成長させる」こともある	
			震災では失ったものばかりではなく、生まれたものもある	
			人の命や絆、助け合い、震災から学んだ知恵、やさしさ、思いやりなど生まれてきたものにも目を向けていきたい	
			震災によって生まれた力	
			新しく生まれてきた、チャレンジ精神や地元愛、復興への思い	
		震災の傷	震災によって失われたもの、苦しみ	
			外で遊ぶ子どもがいても、2時46分になったら家に帰ってしまう子がいた	
			被災者の方は震災から三回もコミュニティを壊された	
		震災の実感	自分の身近なところに被災者はいる	
			他人ごとのように感じていた東日本大震災が急にリアルに身近に感じた	
	私も被災地のことを忘れていたことに気づいた			
	被災の地域差	帰りたくても故郷に帰ることができないという問題がまだにある	○	
		地形や防災意識、暮らしの違いから被害状況が大きく異なる	○	
	復興への理解	心の復興	心の復興という言葉が生まれた	
			復興には人の心が必要不可欠なのである	
		自分なりの復興観	復興とはもがくこと。考え、行動して、失敗してもがくこと	
			「助ける」ではなく「会う」、私の復興の意味が変わった	
		復興と復旧	新しいものを立てることは復興だけど、被災前の町に戻していく、津波に対抗するためのことをするだけでいいのかな	
			復興はしていないけど、復旧はしていると思った	
		復興の進み方	人もそれぞれ復興の度合いも違うだろうと思った	○
場所によって復興の度合いは異なることを実際に感じた			○	
復興の本質		復興という最も大切なことの表面しか見ていなかったことに気づかされた		
		「復興」という言葉によってことの本質が見えなくなってしまうたらいけない		
復興への問い	本当に求められていることとは何かということを改めて自分の中で問い直した			
	復興とは何なのか			

大項目	中項目	小項目	シート	リーダー
社会への理解と批判的まなざし	防災への取り組み	災害への備え	家族と避難場所の確認，防災グッズをそろえることなどしていき たい	
			避難経路，避難場所を確認して緊急時に分かるようにする	
			大学で避難訓練が行われるときには参加しようと思った	
		自分の地域 への意識	私たちは東北の方々のような助け合いをしていくことができるか 不安	
			地元のために自分のできることをしたい	
			同じ悲劇を繰り返さないためには，自分の地域について知ることが 大切	
		防災グッズ	万が一に備えて防災グッズを用意しておく	
			防災グッズなどの準備をする	
			避難所を確認し防災グッズを買っておく	
		防災の重要 性の理解	災害から自分を守るために必要な手段を備えることが重要	
			地域の防災に興味を持つ	
		地域の理 解	釜石の文化	「津波てんでんこ」という考え方を学んだ
	釜石の文化を楽しむ			○
	釜石の文化に触れる			
	釜石の文化や歴史を知れた			
	釜石の魅力		釜石の新たな魅力を見つけた	○
			釜石への愛着心	
			団体の方と仲良くなれ釜石の人の温かさに感動した	
			三陸のきれいな景色を見ることができた	
			釜石の方々は地元をととても大切にしている	
まちづく り	活性化のヒ ント	街づくりに人々の希望をどう取り入れていくか		
		街づくりは未来を見据えなくてはいけない		
		街づくりに欠かせないものは「よそもの」「わかもの」「ばかもの」		
	繋がり的重要 性	地域や周りの人の支え合いが大切		
		地域と人，人と人の繋がりが大切		
	まちづくり の視点	地域コミュニティ・まちの活性化のヒントを学んだ		
		まちづくりに臨む際の気持ちやスキルを学んだ		

大項目	中項目	小項目	シート	リーダー
	メディアリテラシー	メディアの限界	メディアを通して得られる情報がすべてではない	
			実際に見るとテレビだけでは伝わらないことが分かる	
		メディアへの疑問	メディアをただ鵜呑みにしてしまったから批判的になってしまう	
			ニュースが美化され現実が報道されないかを痛感した メディアの役目について疑問を持った	
内面の変化と成長	嬉しさと達成感	嬉しさと達成感	嬉しさと達成感	
			本当に嬉しかったし、達成感があった	○
			達成感と嬉しさ	
			楽しさと感動、疲労感で思わず涙が出た	
		達成感を感じた		
	達成感の共有	達成感をみんなと共有できた		
	団結感と達成感がすごくあった	○		
	自己成長への意欲	成長への意欲	人や物事を客観的に観察し人間関係を大事にできるリーダーになりたい	
			もっと視野や考え方を広めたい	
			人との出会いを大切に、人間的に成長できたらよいと思う	
			自分は正しいかわからないけど少しずつ前に進んでいきたい	
		利用者一人一人を理解する力をもっと身に付けていきたい		
チャレンジ精神	たくさん挑戦して、自分を成長させたいと思った			
今後半年間で知識を増やし「何か」を行いたい				
自己理解	コミュニケーション力	人の話をしても自分ばかり話していて相手に語らせない自分がいた		
		社交的になって回りと楽しく話せるようになっていた		
	自己開示と共感	今まで自分中心の考えだったが、皆の様々な思いを秘めていると実感した時、自分だけではないんだと思えた		
		自分の悩みを仲間打ち明けられる勇気を身に付け信頼関係を築けていた		
	自己受容	自信にあふれながら前に進むのはできないと良い意味であきらめがついた	○	
		自分の弱さを超えるのではなく、その弱さとともに歩いていく方法がある		
	自己分析	(自分は) 責任感ゆえに自己犠牲を惜しまないボランティア活動ばかりだったと思える		
		訪れる度に自分自身の変化を感じる	○	
		自分は他人の言葉に強く影響してしまい、動けなくなってしまうことに気づいた		

大項目	中項目	小項目	シート	リ-ダー
内面の変化と成長	人間理解	笑顔の力	心に傷に対しては笑顔が最大の治療薬	
			人が必死で頑張る姿や笑顔というものは他人を笑顔にすることができる	○
			子どもたちが笑顔になれば、私たちも周りにも笑顔が広がっていくことが実感できた	
			笑顔が人を笑顔にさせる	○
		コミュニケーションの重要性	挨拶の必要性について学んだ	
		全力の大切さ	全力で頑張ることの大切さ	
	繋がり的重要性		人は助け合いのコミュニティを築き生きていくのだと思った	
			人の繋がり大切さと力強さを感じた	
	市民性	自由な発言の条件	意見に評価を下す側の人がいなかったのも自由な発言ができた一つの理由だと思う	
			話し合うとき「相手の意見を否定しない」という前置きを入れてもらえて安心できた	
		多様性の理解	多角的な視点から振り返ることができた	
			自分の意見と違う意見も聞くことができるので学びの場になった 私の固定概念をひっくり返すものがあった	
	大学の学びとの関連	PTSDへの理解	PTSDで一番の薬は楽しむことと笑うこと	
			PTSDになってしまった人には、心の寄り添いと笑顔の寄り添いが大切	
		専門知識	PTSDという大学で学んだことが、実際の目の前の人が負っていた	
			ストレス障害や精神障害について知識を身につけ学びを深めていきたい	
		対人スキル	傾聴して人を観察する力が磨かれていた	
			子どもとの関わりについて「どう話すか、仲良くなるか、笑顔になってくれるか」を考えた	
	学びへの意欲	疑問と学び	ツアーに行っていたから、疑問を持ち、それを知ろうという発展的な学びにつながった	
			復興支援から町おこし、コミュニティ、心のケアというようにたくさんしたことにつながった	
震災への知識		震災のことを学んで知識を増やしておくことが大事		
		自分自身で調べ考えを深めていく必要がある		

大項目	中項目	小項目	シート	リーダー
内面の変化と成長	リーダーシップ	自身の課題への気づき	一番感じたのは自分の経験不足と力不足	○
			(自分は) 企画を立て実行する能力が低いなど改めて感じた	○
		周辺のサポート	参加者の方々に頼り切ってしまった	○
			皆さんに助けていただいた	
		準備不足	用意が不十分だったり, 道具が不良品だったりしたのでこれを反省して今後につなげたい	
			自分の準備不足, 力不足でみんなに迷惑をかけてしまった	○
		他者への信頼	支えの力を肌で感じる事ができた	
			周囲には物事を好転させてくれる誰かがいる	○
		団体の未来	私ができることは, 復興支援ボランティア団体の未来を作ること	○
			次世代へと託すためのミッションとビジョンの土台作り	○
		仲間への感謝	同じような志を持った仲間との出会い	○
			自分を支えてくれる人の大切さを実感	○
		リーダーシップの意識	何もない所から1を考えていく中で一歩間違えると私たちの自己満足になってしまう	○
			ミーティングで人の間違いや指摘ばかり言ってほめることを怠っていた	
			プロジェクトが円滑に進むよう気を配る	○
		リスクマネジメント	体調管理を怠っている自分にとっても苛立った	○
体調管理の大切さ				
不測の事態への対応が不十分だった	○			
自身の生き方への影響	命	命の理解	生というものを考えるには, まず死と向き合う必要がある	
			命の尊さ	
	死者への敬意	死んでも生きる。その人の考えが後世に残る		
		周りの人が忘れない限り生きている		
		亡くなった方々の事を考えて見学や行動することを改めて気づき感じた		
	キャリア形成	自身の生き方	心が疲れて希望が見出せない人, 苦しんでいる人の心が復興できるよう手助け・援助できる人になりたい	
			好きになった土地に何かしらの形で継続的に関わりながら生きていきたい	
	進路	もう一度自分の進路とも向き合いたい		
		自分自身がまちづくりに関わりたいと望んでいることを再確認		

大項目	中項目	小項目	シート	リ-ダー
日常への感謝	関わりを大切に する		自分の周りの人々との関わりを大切に する	
			家族や友人等を日ごろ大切にしながら生きていくことが大切だと 感じた	
			身近な人たちを大切に する	
	幸せの実感		今の自分がいかに恵まれて生活できているのかを実感した	○
			食事をするという当たり前の行為がとても幸せなことに思えた	○
	大切に生 きる		日々の生活を大切に生きていることに感謝	
			一日一日を大切に生きていきたい	○
			当たり前の日常を大切に生きる	
	ボラン ティア理 解	与え、与え られる関係		ボランティアをしに行った自分だったが逆に釜石の人たちに元気を もらって帰ってきた
			現地の方に元気で明るく対応していただき、どっちがボランティ アか戸惑いを覚えた	
			釜石の人々の明るさ強さに元気をもらいました	
			釜石の人と話すことで心が温かくなり元気をいただきました	
与えられた もの			前を向く勇気もらった	
			ボランティアをしている感じはしなかった。元気をもらえた	
ボランティ アの魅力			ボランティアの楽しさも知りました	
			ボランティアの良い所を再認識	
ボランティ アへの疑問			ボランティア活動っていったい何なんだろう	
			よいさ踊りはボランティアなのだろうか。踊ることで何のためになる のだろうか	
身の丈に あったボラ ンティア		ボランティア活動は自分の身の丈にあったことをすればいいんだ なと思いました		

以上の結果から、学生たちはまず社会に対しての理解を深めていることが分かる。具体的には、被災地においてその被災の状況から復興への歩みについて、自分の目で見て直接話を聞く中で理解を深めていく。(震災への気づき・復興への理解) そのことは同時に、メディアで伝えられていることとのギャップを感じ、メディアの限界や理解の方法を深めていくことになる(メディアリテラシー)。また、「同じ悲劇を繰り返してほしくない」という現地の方々の思いにも触れ、次の被災者は自分たちになるかもしれないこと、またそのために具体的にできることがあることに気づく(防災への取り組み)。

さらに、釜石の文化や魅力に触れ復興過程のプロセスに関わることで、被災地としてではなく、魅力的な地域としてまちを理解するとともに、まちづくりに対する認識も深めていることが分かる

(地域の理解) (まちづくり)。

また、活動に関わる中で学生たちの内面にも変化が起きていることが分かる。活動に取り組んだことへの喜びや達成感を得ることで、自身の成長への意欲が高まっていることが分かる(嬉しさと達成感)(自己成長への意欲)。また、被災地で困難を抱えながらも復興に取り組む現地の方々との姿や交流、さらには一緒に活動に取り組む仲間とのやり取りを通して、自分自身・他者への理解が進み結果的に自分・他人という枠を超えて、人間とは何かについての理解を深めていることが分かる(自己理解)(人間理解)。さらに、自分とは違う他者との協働の中でどのような物事を達成していくかについて学ぶと共に、自身が大学で学んでいることとの関連にも気づき、大学での学びが活動で活かされると共に、さらなる学びへの意欲にもつながっていることが分かる(リーダーシップ)(市民性)(大学の学びとの関連)(学びへの意欲)。

学生たちは被災地での活動を通して、自らの生き方についても深める機会となっている。被災地では、生と死が交錯し人の死をリアルに感じることもある。学生に語り掛けてくださる方も、身近な人を失っていることもあり、死者の思いを背負って生きている。また、震災遺構に立つことで、そこで命を失った人たちに思いをはせ、自然と手を合わせる経験をする。それらのプロセスから、限りある生命の尊さについて理解を深める機会となる(命)。そのことは同時に、今ある日常が当たり前のものでなく、明日も永続的に続く保障はどこにもないことに気づかされ、今の自分自身の環境や家族・仲間への感謝の思いにつながっている(日常への感謝)。結果として限りある自分の命をよりよいものにしたいという思いから、自身の進路や就職についても改めて向き合う機会となっている(キャリア形成)。

最後に「ボランティア理解」については、大項目にはまとめられなかったものの、自分たちがボランティアとして関わる中で、改めて疑問を持ち、活動を通してその魅力と自分にあったボランティアを見出していることがうかがえる(ボランティアへの疑問)(ボランティアの魅力)(身の丈にあったボランティア)。また、「何かを与えるのがボランティア」と思い活動に参加した学生たちにとって、「結果的に自分たちに多くのものが与えられた」との実感を持つことになったことが分かる(与え、与えられる関係)(与えられたもの)。

第二節 考察

1. 学生たちの特徴的な学び

先行研究でも触れたとおり、災害ボランティアにおける教育的な意義については、すでにいくつかの研究で指摘がなされている。本稿では、これまでの研究ではあまり指摘されてこなかった点について、考察を行う。一つは「命」への理解である。「生というものを考えるには、まず死と向き合う必要がある」とのコメントのとおり、死を見つめることは生を見つめることでもある。現代社会では、普段感じることの少ない死の実感、即ち自分の命の有限性を実感した時、限られた命をど

う活かしていくのかを真剣に考えるようになる。そのことが、進路や仕事の選択、そして「自身の生き方への影響」を与えていることがうかがえる。もう一つは、「ボランティア理解」において「与え、与えられる関係」が抽出されているが、これは、金子（1992）⁽¹⁴⁾が「ボランティアは助けることと助けられることが融合し、誰が与え誰が受け取っているのか区別することが重要ではないと思えるような、不思議な魅力にあふれた関係発見のプロセスである」と指摘したように、まさに実感を持ったボランティア理解の深まりであると考えられる。

2. 復興期のボランティア活動の学び

では、本稿のテーマでもある「復興期」における学生ボランティアの学びとはどのようなものだろうか。今回の結果からは「地域理解」「まちづくり」というキーワードの中にその学びを見ることが出来る。復旧期の活動は通常、「被災地」に赴くのであって、その地域の固有性からは遊離しており、活動内容においてもがれき撤去など、どこでも同じようなメニューになることが多い。しかし、復興期の活動においては、その町固有の歴史・文化を踏まえた上で、そのまちらしさを取り戻しさらに発展させていくことが目的となる。そのため、そこに関わる学生たちも、町の文化や魅力についても学び、自分たちができることが何かを真剣に考えていることがうかがえる。また、まちづくりに取り組む地元の方々との交流を通して、復興という枠を超えて、まちづくりに必要な知識や技術について学びを深めていることが分かる。

3. プロジェクトリーダーと一般参加者の視点の変化

一般の参加者と3ヶ月前から企画に関わり、当日もリーダーとして関わった学生とはどのような違いがあるだろうか。抽出された項目の中で、リーダーとして携わった学生の項目を見ると、他の学生とは明らかに傾向が異なる部分が見出すことができた。それは、「リーダーシップ」の項目である。自分も周りの人も「リーダー」として認識されていたことで、自覚的に行動した結果、自身の未熟さに気づき、リーダーに求められる知識・技術を意識すると共に、目標となるリーダー像についても深まっていることが分かる。

4. 学生の特異性を踏まえた復興期の学生ボランティアの役割

では、復興期において学生ボランティアはどのような役割を担うことができるのだろうか。学生ボランティアの特徴を踏まえながら、考えてみたい。石野（2013）⁽¹⁵⁾は学生ボランティアが地域に対してどのような潜在的な機能を持っているかを考察し、「相手によって様々な解釈・位置づけがされ、変幻自在に役割を変え得る。不安定さの中で多様な関係性を生み出すことが彼等（大学生ボランティア）ならではの特出すべき効果かもしれない」としている。これは、学生がボランティアとして支援者の役割を担っていたとしても、その役割が固定化されず、支援を受ける側にとっては、孫や兄弟等のような身近な存在になりうるということである。さらに、支援する、されるの関係性においても、関係性が固定化されず、ボランティアであっても双方向の関係性が築きやすいということにつながる。災害ボランティアにおいて支援を受ける側には「心理的負債感」⁽¹⁶⁾があるといわ

れている。著者自身被災地において現地の方から「支援され続けると心が折れる」という言葉を聞いたことがあるが、一方的な支援を受け続けることで、決して望んでなかったわけではない「被災者」としての役割を背負い続けることとなり、心理的負債感が増すと考えられる。学生ボランティアは、このような固定化してしまいがちな支援する・されるの関係を越えて、被災者と双方向の関係を築きやすいという特質があると考えられる。

終章

以上みてきたとおり、大震災におけるボランティアの役割は、時間が経つごとに変化しており、復興期のボランティアには被災者自身の自立の視点と被災者との双方向協働型の関わりが求められている。特に学生ボランティアについては、その特性故に支援を受ける側の「心理的負債感」を軽減しうる効果がある点を指摘した。学生のボランティア活動、特に災害・復興ボランティアにおける教育的意義は、かねてより研究がなされてきたが、本調査の特徴として、死と生を踏まえた「命」への理解と「ボランティア理解」の深まりが見出された。また、復興期の学びの特徴として、被災地としてではなく、その町の歴史・文化等の固有性を理解し、「まちづくりに向けた知識・技術への学び」が深まっていることが明らかになった。さらに、リーダー層では、リーダーとして自覚的に活動に取り組んだ結果「リーダーシップ」への学びが深まっていることも明らかになった。ただ、復興期の学びとの明らかな関連性は見いだせなかった。

今回分析を行ったデータは、学生の活動への感想が主たるものであるため、学生の学びの全体像を示しきれっていないことが考えられる。また、対象が本ツアー参加者に限られており、他の研究との比較によって有用性が検証されたわけではない。今後は同様の調査研究との比較検討することも必要であろう。今後の課題としたい。

引用文献

- (1) 復興庁『復興の現状と課題』平成29年3月1日
- (2) 全国社会福祉協議会（2017年2月14日現在）「東日本大震災ボランティア活動者数の推移—災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数の推移（仮集計）」(<https://www.saigaivc.com/>)〈2017.11.1 確認〉
- (3) 山下祐介・菅摩志保『震災ボランティアの社会学—〈ボランティア=NPO〉社会の可能性』ミネルヴァ書房 2002
- (4) 太田美帆「東日本大震災の復旧・復興支援における学生の役割」『玉川大学文学部紀要』第54巻 2013年 pp.167-190.
- (5) 渥美公秀『災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミックス』弘文 2014 pp.128-129
- (6) 関嘉寛「東日本大震災における市民の力と復興—阪神・淡路大震災／新潟中越地震ごととの比較—」『東日本大震災と社会学』ミネルヴァ書房 2013 p.91・p98
- (7) 茶屋道拓哉・筒井陸「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」『九州看護福

- 社大学紀要』第12巻1号 2012.03 pp. 25-37.
- (8) 石田易司・谷内祐仁・脇坂博史・福山正和「学生の災害ボランティア活動と教育効果」『桃山学院大学社会学論集』第47巻1号 2013.08 pp. 61-86.
- (9) 市来百合子・大久保千恵「教育復興支援ボランティア学生の経験—ボランティア学生への心理的支援への考察—」『教育実践開発研究センター研究紀要』第22巻 2013.03 pp. 115-122.
- (10) 市川享子「東日本大震災復興支援の実践から生まれた学生の学び」『ボランティア学研究』第15号 2015 p. 151
- (11) 津止正敏・桜井政成「学校教育とボランティア活動を巡って—本書の論点整理—」『ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践—』ミネルヴァ書房 2009 p. 8
- (12) 野津隆志・門間由記子「東日本大震災支援のための学生ボランティア活動の課題」『商大論集』第66巻1号 2014.09 pp. 41-52.
- (13) 釜石市『かまいし復興レポート Vol. 40』2017年8月1日改訂
- (14) 金子郁容『ボランティアもうひとつの情報社会』岩波新書 岩波書店 1992 p. 6
- (15) 石野由香里「『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能—ボランティアをする／される関係をズラす効果が地域の場づくりへ与えた影響—」『生活学論叢』第23巻 2013 pp. 3-16.
- (16) 田中優「非被災地における被災者支援の社会心理学的問題」『大妻女子大学人間関係学部紀要』第13巻 2011 p. 82.

参考文献

- 立教大学コミュニティ福祉学部『復興支援って何だろう?』本の泉社 2016
- 菅磨志保・山下祐介・渥美公秀『災害ボランティア論入門』弘文堂 2008
- 桜井政成編著『東日本大震災とNPO・ボランティア 市民の力はいかに立ち現れたか』ミネルヴァ書房 2013
- 黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史「学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察—」『目白大学心理研究』第四号 2008
- 佐藤郁哉『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社 2008
- ウヴェ フリック『質的研究入門—「人間の科学」のための方法論』春秋社 2002
- 長沼豊『市民教育とは何か ボランティア学習がひらく』ひつじ市民新書 2003

Student Volunteers' Learning and Roles in the Disaster Reconstruction Period : Practical Support for Reconstruction

Torao KAWATA

Abstract

In this research, we examined student volunteers' roles and learning by focusing on their practical support during the disaster reconstruction period. Results showed that they recognized "life (living) itself" and deepened their "understanding of what the volunteer is." Clearly, their recognition of the "knowledge and skills of reconstruction" was enriched by understanding the uniqueness of history and culture etc., of the town in which they volunteered. Furthermore, students in the leader group became aware of leadership through their practical work. In general, volunteer support during the construction period required cooperative interaction between the self-reliance of victims and volunteer supporters. Notably, however, student volunteers may reduce victims' psychological burden thanks to their characteristics.

Key words: volunteer, student, civil activity, reconstruction support